D期：白磁椀Ⅶ類・皿Ⅲ－１類，青磁同安窯・龍泉窯系椀Ⅰ類（少数）
E期：青磁龍泉窯系椀Ⅱｂ・Ⅱａ，陶器Ⅰ・Ⅲ類，鉢Ⅵ・Ⅰ－２類（施釉）
F期：青磁龍泉窯系椀Ⅲ類・坏Ⅰ－１ａ，白磁Ⅸ－１・２類椀・皿，徳化窯系白磁印花唐草文碗
G期：白磁森田Ｃ類，青磁泉州タイプ・Ⅳ類大椀・小椀・皿
H期（15世紀）：白磁森田Ｄ類，青磁上田Ⅱ類・ＢⅡ・ＣⅡ・ＤⅡ・ＥⅡ（倣龍泉系青磁【土龍泉】）
16世紀：青磁上田Ⅲ・Ⅳ類，白磁森田Ｅ類，青花景徳鎮及び漳州窯椀・皿
※　他に白磁壺Ⅲ類がＣ～Ｆ期のいずれかの時期のものである。

次に，国産のものをみてみたい。それらは，在地土器・東播磨系須恵器片口鉢（以下，東播系鉢）・備前の擂鉢（15・16世紀）・備前の大甕・常滑の甕・備前を模した在地の瓦質土器擂鉢・瓦質土器羽釜・フライパン形土器（焙烙・炒り具）・初期薩摩焼（主は堂平窯産）・肥前系陶磁器（染付・陶器など）などがあり，多種多様である。

註
1　G期に属するこれらは沖縄・東南アジアに多いものである。H期まで下る可能性も若干含む。
2　山本信夫氏（早稲田大非常勤准教授）の御教示による。アルファベットのついた時期区分も彼による太宰府分類のものである。なお，泉州タイプについては亀井明徳氏と手塚直樹氏が指摘するものという。なお，『東アジアの海とシルクロードの拠点福建』【展示図録】（愛知県陶器資料館2008）では，類似のものが，磁灶窯出土品にみられる。

第５節　鹿児島県内出土の火打金・火打石

⑴　はじめに

上水流遺跡では，中世以降のものとみられるハンガー形の鉄製品と，明確な加工痕を持たないメノウ・玉随製の石製品が出土している。

特に，ハンガー形の鉄製品については，調査時点から気にはなっていたものの，どのようなものかわからず，そのままになっていた。ある日，屋鈍遺跡（大島郡宇検村）出土鉄製品のＸ線写真を見る機会があり，これが上水流遺跡出土品に類似していることに気付いた。そして，藤木聡氏の論考（藤木2004）があることを知り，これが「火打金」であることを確認した。また，県内には火打石の産地が他地域と比較して多いのに反して，火打金とともにほとんど確認されていないということも確認した。

これを受け，整理作業の段階で中近世の遺構内および包含層中に存在する原石もしくは石核としていたものについて，再度見直しを行った。その結果，角がつくりだされて，火打石との打撃によるとみられるつぶれがあるものを抽出することができた。つまり，火打金と火打石の両方を同じ遺跡から確認することができた。そこで，今回は県内出土遺物について見直すこととし，火打金・火打石について集成を試み，若干の考察を加えることとしたい。

⑵　県内の火打金について

藤木氏が確認した時点では，桑幡氏館跡のみであった。今回確認したところ，未報告のものも含めて10箇所で発見されていることが判明した。この中には，報告書刊行済みのものもあるが，文中で「火打金」としているものは少ない。

出土傾向としては，薩摩国が８箇所，大隅国が２箇所，奄美が１箇所となっている。特に集中している薩摩国は，いずれも東シナ海側に偏っている。横川城跡（霧島市）と虎居城跡（さつま町）が内陸に位置する。

該当時期については，大島遺跡（薩摩川内市）が古代で，県内でも最古の例である（註１）。中世では，桑幡氏館跡（霧島市）・横川城跡（霧島市）・中之城跡（阿久根市）・虎居城跡（さつま町）・上野城（薩摩川内市）・持躰松遺跡（南さつま市）があるが，明確な出土状況を示すものはなく，場合によっては近世に入るものもあるかもしれない。現時点では，近世のものとされているのは，上ノ平遺跡（日置市）のみである。

上水流遺跡出土品は，遺物からみて中世後半～近世前半（15～18初頭頃）が想定される。

⑶　県内の火打石について

藤木氏が確認した時点では，弥勒院跡のみであった。今回確認したところ，未報告のものも含めて10箇所での出土例を確認した。この中には，報告書刊行済みのものもあるが，文中で「火打石」としているものは小倉畑遺跡のみであった。

傾向としては，薩摩国が２箇所，大隅国が２箇所となっている。また，虎居城のように内陸部の河川沿いに立地するものもあった。

時期については，弥勒院（霧島市）のものが近世とされる以外は，いずれも中世以降としかいいようがなく詳細は不明である。

⑷　まとめにかえて

以上のように，火打金と火打石について県内の概観を行ったが，決して資料数が多いとはいえない状況である。人間の長い歴史の中で，「火起こし」という作業は，生きていくために重要な行為であったはずであるが，その痕跡が少ないというのは本来不思議なことである。実際のところ，不明鉄器として報告されていない可能性も考えられるし，さびにおおわれて確認できなかった場合も少なくなかったのではなかろうか。今回確認できたもの

についても報告の段階ではほとんどが性格不明の遺物として扱われていた。

藤木氏によれば，「九州の場合，縄文時代の石核として報告された火打石あるいは用途不明品とされた火打金など，火打金や火打石という遺物に対する認識の有無に大きなウェイトがあろう」という。まさに本県の資料もそれに該当するもので，今後は古代以降の遺跡から出土する鉄片や石片などについても，注意の目を向けていかなければならない。

註

⑴　藤木氏から９世紀代の可能性があるというご教示を得ている。

引用・参考文献

藤木聡2004「九州における火打石・火打金　－資料集成と基礎的な整理－」『古文化談叢』第51号　九州古文化研究会

第６節　上水流遺跡出土の特徴的な遺物について

⑴　はじめに

本遺跡出土遺物の中で，注目されるものがある。たとえば，東播磨系須恵器片口鉢・瓦質土器羽釜・鉄鍋・鉄製小札などで，多種多様である。ここでは，これらの注目される遺物について取り上げ若干の考察を行いたい。

⑵　東播磨系須恵器について

兵庫県の神出（神戸市）および魚住（明石市）の窯跡出土資料と実際に比較を行った。その結果，形態は生産地の13世紀代のものとほぼ同じであるが，胎土と釉薬のかかり具合が異なるもので，神出・魚住のどちらでもない可能性があることが明らかになった。具体的には，胎土が赤色と白色の層状になる点が最も異なる点といえよう。加えて，見込みや口縁部に自然釉がかかるものも目立つが，これも実見した窯跡出土資料には見うけられなかった。

また，甕についても同様にタタキとナデが全く異なることが明らかになった。タタキは，矢羽根状（あるいは綾杉状）に平行タタキを組み合わせたもので，「東播磨系」の技法に類似する。しかしながら，神出および魚住の窯跡出土資料をみる限り，本遺跡出土資料ほど丁寧には矢羽根状にタタキを行っていないことが確認された。

この事実から，本遺跡出土の東播磨系とされるものは産地不明であり，広義の「東播磨系」であるものの厳密な「東播磨産」ではないことがほぼ明らかとなった。今後，県内各地出土のものも含め再検討を行う必要があろう。

ただし，窯内では様々な現象が起きており，胎土の色だけではなんともいえないのではないかとの意見もある。たとえば，焼成中になんらかの事（窯の崩落や熱の加減など）があったため酸化してしまった結果，胎土が赤色と白色の層状となる場合もありうるという。

しかしながら，実見した窯跡資料にはそのようなものはなく，また数人の神出および魚住の窯跡調査担当者からもそのような例はこれまでにないとの意見を得ている。いわゆる「東播磨」ではなく，その周辺（西播磨や北播磨など）や，九州を含む他の地域で生産された可能性も模索する必要があろう。

⑶　樺万丈（樺番城）系須恵器について

本遺跡では，いわゆる「樺万丈」系の須恵器も出土している。樺万丈は，熊本県荒尾市の小岱山西麓で生産された須恵器で，おおむね13世紀頃のものと考えられている（吉岡1994・美濃口1997）。

県内でも数箇所で出土例があり，流通品であるとされている。しかし，美濃口氏によって，有明海を越えるものではなく，かつ樺万丈ではみられない「壺形」の器形のものが鹿児島に存在するという事実が指摘されている（美濃口2007）。つまり，県内で出土する「樺万丈」系の須恵器は，「樺万丈に似て非なるもの」であるということになる。本遺跡出土品も，そのようなものである可能性が考えられる。また，美濃口氏によれば，鹿児島県西部地域に集中する傾向があり，「当該地域に同系統の須恵器窯が存在する可能性を指摘できる」という。今後，注目すべき資料となるかもしれない。

⑷　肥前の見込荒磯文染付（第191図）（上水流２に掲載）

本遺跡でも多くの肥前系陶磁器が出土しているが，その中でも注目されるのが，見込荒磯文の染付碗である。

見込荒磯文の染付は1650年代中頃～1660年代のものとされており，比較的近い年代の中国磁器がモデルとなっている。また，東南アジアなどへ向けた海外需要を強く意識した製品の中でも代表的なものであるという（野上2005）。これが本遺跡から出土しているということは，本遺跡の性格の一端を示す可能性がある。

⑸　その他

上記の遺物以外に，注目される遺物には鉄製品がある。

本遺跡からは，鉄鍋片とみられる鋳造鉄器片が出土している。口縁部などの特徴的な部位はなく，器形や部位などは不明である。

周辺では，上加世田遺跡で良好な出土例があるので関連があるかもしれない。今回は触れることができなかったが，こわれた鉄鍋片を用いて農具などに再加工される場合も他の地域では多くみられることから，鉄生産とも関連する可能性もあるので，今後注目すべき遺物であるといえよう。

また，鉄製小札や雁股鏃などの武具・武器も出土している。これは甲冑の部品の一部であるが，島津忠良による戦い（註１）も周辺で行われていることから，関連す

表12　鹿児島県内出土の火打金

遺跡名	所在地	出土遺構	備　　考
桑幡氏館跡	霧島市隼人町神宮二丁目字川上	56号土坑	旧57号土坑含む，中世
上野城跡	薩摩川内市百次町字上野	―	中世か
大島	薩摩川内市東大小路町	―	９世紀頃か？
上ノ平	日置市伊集院町下神殿字上ノ平	―	近世
横川城跡	霧島市横川町中ノ字城山	―	中世か
中之城跡	阿久根市山下字鳴川	ピット６	中世か
屋鈍	大島郡宇検村字屋鈍	―	中世か
虎居城跡	さつま町虎居	―	中世か，未報告
持躰松	南さつま市金峰宮崎字持躰松	―	中世か
渡畑	南さつま市金峰宮崎字渡畑	―	中世か，未報告
上水流	南さつま市金峰花瀬字上水流・森山	―	中世と近世か

表13　鹿児島県内出土の火打石

遺跡名	所在地	出土遺構	備　　考
弥勒院	霧島市隼人町内字堀之内	―	近世（18～19世紀），未報告
栫城跡	いちき串木野市上名字門前ほか	―	中・近世，未報告
小倉畑	姶良町西持田字小倉畑	―	中・近世，蔵王岳産珪質頁岩およびチャート
虎居城跡	さつま町虎居	―	中世か，未報告

文献一覧

阿久根市教育委員会2003『中之城跡』阿久根市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

江戸東京博物館2002『火打ち道具の製作　調査と映像記録』映像音響資料制作に伴う調査報告６　東京都江戸東京博物館調査報告書　第14集

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（34）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（68）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『上ノ平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（70）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大島遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（80）

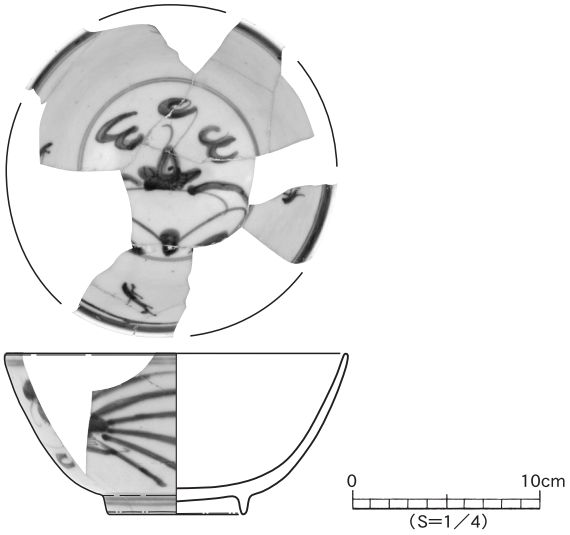
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『持躰松遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（120）

加世田市教育委員会1985『上加世田遺跡－１』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

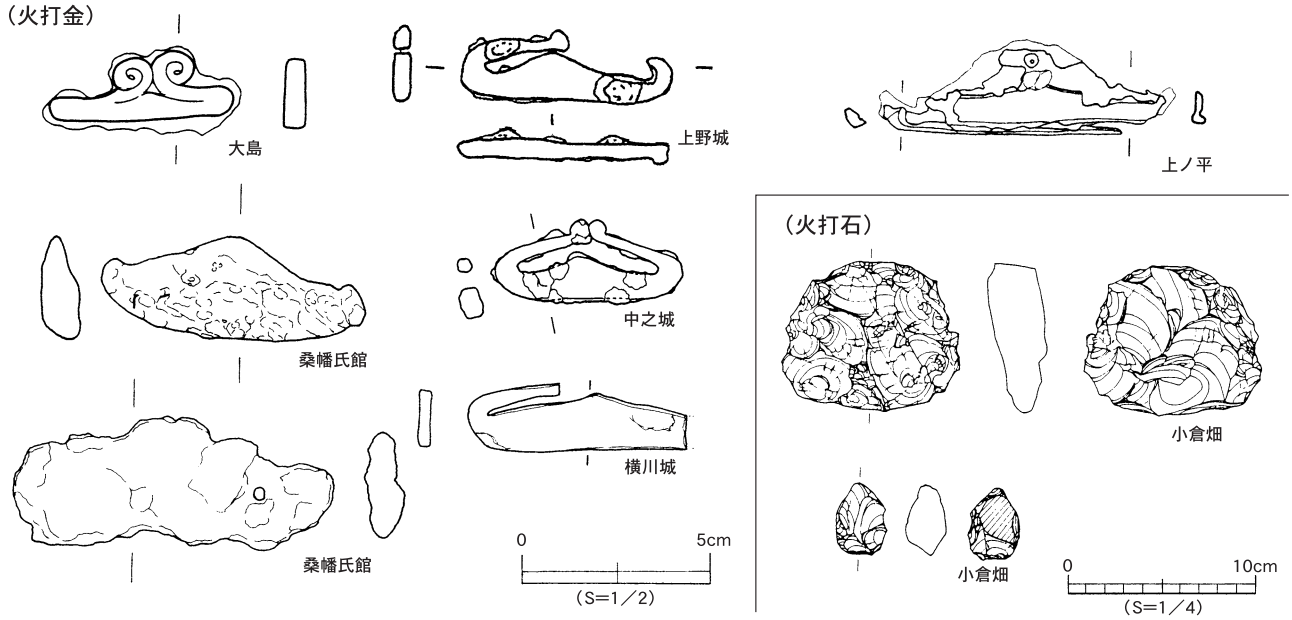
隼人町教育委員会2003『桑幡氏館跡－第３次調査－』

藤木聡2004「九州における火打石・火打金　－資料集成と基礎的な整理－」『古文化談叢』第51号　九州古文化研究会

横川町教育委員会1987『横川城跡』横川町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）



第191図　見込荒磯文碗（肥前）



第192図　火打金・火打石集成図

る可能性がある。

註

1　『三國名勝図会』によれば，花瀬打立本（現在のところ詳細な位置は未確認）は天文７(1538)年に島津忠良が別府城を攻撃した時に陣したところと伝えられるという。

引用・参考文献

野上建紀2005「有田の文様　－17世紀中頃～後半の窯場の様相と文様の変化－」『金大考古』第47号　金沢大学考古学研究室

吉岡康暢1994「第一部　中世須恵器研究序説」『中世須恵器の研究』吉川弘文館

美濃口雅朗1997「樺番城窯跡の中世須恵器(1)」『肥後考古』第10号

美濃口雅朗2007「樺番城窯（熊本県）」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編　全国シンポジウム「中世窯業の諸相　～生産技術の展開と編年」実行委員会

（上床　真）

魚住の甕

魚住の甕

魚住の片口鉢

魚住の片口鉢

上水流の片口鉢　No.86

上水流の片口鉢　No.97

図版14　東播磨系須恵器

表14　鹿児島県内出土の鉄鍋

遺跡名	所在地	出土遺構	備　　考
上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑字上加世田	－	口縁部
上野城跡	薩摩川内市百次町字上野	－	
和早地遺跡	大島郡喜界町荒木字和早地	－	口縁部・表採・中世か
上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬字上水流・森山	－	破片